



「琉球建築」史話Ⅱ

御嶽——琉球開闢、そして
首里城二つの御嶽二つの正殿

理事長 高橋 康夫

「幻の大陸」——八重干瀬

宮古島の北方、およそ16kmのところ「幻の大陸」ともいわれる八重干瀬（名勝・天然記念物）があります。東西約6.5km、南北約17kmにわたって広がる、日本最大級のサンゴ礁群が八重干瀬です。いつもは海中に隠れているのですが、春から夏にかけての大潮の時期には、干潮になると、海面上に約1メートルの高さの広大な陸地として姿をあらわします。広さは宮古島の面積（204.5km²）の3分の1ほどになります。これが「幻の大陸」と呼ばれる理由です。

潮位の差が最大となる旧暦3月3日には、陸地化したサンゴ礁に女性が下り立ち、海水で身を清めて厄払いをする行事、「サニツ」がありました。

干瀬は、沖縄本島ではヒシといいます。海面近くに形成された平坦なサンゴ礁のことです。海のなかにあるものも、海面上に出ているものも、ヒシです。

干瀬、そして八重干瀬は、なぜか琉球の開闢神話が語る琉球の原初的な景観、そして琉球・沖縄の人々が信仰する聖地、「御嶽」を思い起こさせるのです。

第5話

アマミク、〈島〉をつくる ～琉球開闢

一 琉球開闢の神話

最初の正史『中山世鑑』（1650）

『中山世鑑』は、国王の命によって昔のことを広く知っているものに話し合わせ、その内容を羽地朝秀（1617-75）が撰述したものです。羽地は王族の名家出身で、のちに国政最高の地位の「摂政」に就いて辣腕をふるいます。近世琉球を代表する政治家です。

さて、琉球開闢神話は、琉球・沖縄の人々にとって大切なこと・ものを語っていると考えられます。最古の正史は、琉球の開闢をどのように記述したのでしょうか。長文ですので、大意を記しましょう。

地上に「霊処・霊地」がありますが、いまだ〈島〉になっていません。そこで天帝の命により、アマミクが琉球の創世神となりました。

アマミクは天の土石草木をもって〈島〉をつくり、その後、〈森・嶽〉をつくります。まず一番に「国頭辺土の安須森」、次に「今鬼神（今帰仁）のカナヒヤブ」、次に「知念森、斎場嶽、藪薩の浦原」、次に「玉城アマツツ」、次に「久高コパウ森」、次に「首里森、真玉森」、次に島々国々の嶽々森々をつくりました。

人がいないまま数万年が経過しましたが、アマミクの願いによって天帝の子の男女神が地上に下りました。その女神が生んだ三男二

女が、国の主（天孫氏）、諸侯（按司）、百姓、君（高級神女）、祝（神女）の始まりです。琉球の人々と社会のルーツです。

国土と社会が形成されて、琉球を守護する神、キミマモンが出現しました。

その後も未開の状態が続き、人が繁栄できなかったのも、アマミクは五穀の種子のうちむぎあわまめきび麦粟菽黍を久高島に蒔き、また稲を知念大川の後、また玉城オケミヅに植えました。

創世神アマミク、国土と九御嶽の創成、人々と社会の成り立ち、守護神キミマモンの出現、五穀の伝来などが語られています。

このほか、天には最高位の天帝をはじめ多くの神々がいること、アマミクが天の「城」にいることなども、興味深く思われます。全体として、羽地朝秀をはじめ王府周辺の人々、そしておそらく首都である首里の地域に伝承されてきた神話的世界観をうかがうことができるようです。

『琉球神道記』（1608）

琉球開闢神話の最古の記録は、浄土宗の僧侶の袋中が著した『琉球神道記』（自筆稿本は重要文化財）です。袋中は1603年、明に向かおうとして琉球に漂着し、1606年まで那覇に滞在しました。尚寧王の帰依をうけて那覇に桂林寺を創建し、教化にあたりました。袋中の浄土宗布教と『琉球神道記』は、近世琉球に大きな影響を与えました。ちなみに、京都三条大橋の東にある檀王法林寺は、袋中が帰国後の1611年に建立したものです。

『琉球神道記』は那覇の信者からの情報などもあり、古琉球を知るための貴重な史料です（『中山世鑑』も利用しています）。巻五の琉球開闢、国土の創成の箇所を引用します（原田禹雄訳注『琉球神道記』（榕樹書林、2001）を参照し、口語体にしました）。

昔、この国のはじめ、まだ人のいない時に、天から男と女の二人が下られました。男はシネリキュ、女はアマミキュといひます。二人

は小屋を並べて住みました。

この時、この島はなお小さくて、波に漂っていました。そこでダシカという木をあらわして、それが繁殖して山の形をつくりました。次にシキュという草を繁茂させ、また阿檀という木を植えて、ようやく国の形になりました。

琉球開闢について、最古の史料『琉球神道記』とそれからおよそ半世紀後に編纂された正史『中山世鑑』を比べてみると、少なくないちがひがあります。『琉球神道記』では、ふしぎなことに創世神が男女二人いたといひます。また女神の生んだ三子を地域の主と祝と土民の始まりとし、国の主と君の始まりには触れません。前者は唯一の創世神という古い伝承から変移した姿、そして後者は人の始まりについて古い伝承を残しているように思えます。また『琉球神道記』が御嶽の創造について記していないことも、注目すべき点でしょう。

『琉球神道記』と『中山世鑑』は、那覇と首里それぞれに異なるかたちで伝承されていた開闢神話によったのでしょうか。国の主と君々の始まり、そして御嶽の創出の叙述がある『中山世鑑』には、王権の正統性・正当性を裏付けようとする撰述者の意図が透けてみえるようです。

『聞得大君御殿並御城御規式之御次第』（1875）

琉球王国の最高神女であるきこえおおきみ聞得大君による儀礼を書き留めたものです（以下『御次第』と略記）。琉球王国最末期の『御次第』は、儀礼とは別に、七つの御嶽の出現と創世神アマミク・シラレクによる国土の造成、人の誕生などを説いています。国土造成の部分引用しましょう（口語体にし、改行を加え、説明を括弧内に補足しています）。

国の立ち始めは、くにがみまざり国頭間切のおおひの御嶽、なきじん今帰仁のこはおの御嶽、首里森の御嶽、そやたまぐすくはの御嶽、弁之御嶽、久高こはおの御嶽、玉城

アマミク
雨辻、この七御嶽は、昔、荒海に干瀬が出現してできたのです。

アマミクとシラレクは、天よりこの七御嶽へお下りになり、ご覧になると、東の浪は西に越え、西の浪は東に越えていました。しかし、この形なので、土と木と草を下ろすなら国になるでしょうと、天に登られて、クバ、マツ、ススキ、アダン、浜はう木（ハマゴウ）の五つを下ろされました。

『御次第』の国土の始まりは、七御嶽ありき、です。アマミクが創造したのではなく、「荒海に干瀬が出現してできた」超自然的な現象とするのが『御次第』の立場です。七御嶽の構成も、『中山世鑑』の九御嶽とかなり異なっています。首里城中の真玉森がなく、城外の弁之御嶽が加わるのは、王国末期における王権とのかかわりを反映しているのでしょう。

古歌謡集『おもろさうし』

琉球開闢神話に関連する史料は、もう一つあります。琉球王府（第二尚王統）が採録・編纂した『おもろさうし』（県立博物館本は重要文化財）です。12世紀から17世紀にかけて謡われたオモロのなかにも、断片的ですが、アマミキヨ・シネリキヨによる島と国の創成、グスクと御嶽の創出などの神話がみられます。

すでにお気づきのように、創世神の呼び名がいくつも出てきました。ペアであらわれるので、早くから男女二神と理解されたりもしてきました。しかし、シネリキヨなどはいずれも対語なので、一神と考えるべきであろうという説があります（『おもろさうし辞典・総索引』）。妥当なみかたと考えています。

いくつかの琉球開闢神話を踏まえて、創世神アマミクのつくった〈島〉のありさまを説明しましょう。

二 国土をつくった「土石」

波が打ち越す霊地、島、干瀬

国土創成以前の状況について、史料をまとめてみます。

『中山世鑑』——霊処・霊地があるが、波が打ち越し、島になっていない。

『琉球神道記』——島は小さくて、波に漂っている。

『御次第』——干瀬が出現し七御嶽ができたが、波が打ち越し、島になっていない。

「神の住むべき霊処」あるいは七御嶽は、波に洗われる海面近くの島といったイメージでしょうか。平坦なサンゴ礁、つまり干瀬の姿がおのずと浮かんでくるようです。『御次第』では、干瀬である七御嶽が国土の始まりであることも注目されます。国土と御嶽の創成の順序が、『中山世鑑』と『御次第』では真逆になっているのです。

波が打ち越すところや干瀬、小島を陸地化するには、隆起させる、土盛りするといった手段が必要となるでしょう。琉球の島々の創成について、『中山世鑑』はアマミクが天の「土石草木」を用いてつくったというだけですし、『琉球神道記』と『御次第』は「草木」を具体的に語るものの、「土石」については一言もありません。そこで、「いまだ島になっていない」ころの沖縄本島の姿や、本島をつくった「土石」を想像してみることにしましょう。

沖縄本島の地質

琉球列島は、もともとはユーラシア大陸の東縁の海域にありました。地殻変動や海水面の変動による陸域・海域の拡大と縮小を繰り返すなかで、ついには大陸から分離して島嶼化し、しだいに現在の島の配置や形に近づきました。最終氷期（約7万年前～約1万年前）のころには山下町洞穴人（約3万6千年前）や港川人（約2万年前）などの後期旧石器時代人がこの島に渡ってきました。

沖縄本島の表層地質である琉球層群は、琉球石灰岩層（サンゴ礁に生息するサンゴや貝などの石灰質の殻や骨格が堆積し固結した地層）と、礫岩や砂岩・粘板岩などの堆積した地層である国頭礫層の総称です。ともに200万年前から現在にいたる時代、人類の進化の時代に堆積した地層です。

中南部は琉球石灰岩層で、北部は国頭礫層です。別のいいかたをすると、沖縄本島は石灰岩の中南部と非石灰岩の北部からなっているのです。

特徴的な土壌があります。台地・段丘・山地の表層をつくっている赤褐色の風化土壌で、昔からマージと呼ばれています。マージは二つあって、琉球石灰岩が風化してできた島尻マージと、非石灰岩の砂岩や礫岩などが風化してできた国頭マージです。

このほかに中南部には、琉球石灰岩層の下にある泥岩（島尻層群）が風化してできた灰色の土壌であるジャーガルと、海岸部の沖積土壌があります。その分布割合は、北部の国頭マージがもっとも多くを占め（約55%）、次に南部の島尻マージ（約27%）、ジャーガル（約8%）、沖積土壌（約10%）となっています。

沖縄本島の80%あまりを覆うマージには、「真地」という漢字があてられています。真地は、「真水」のように、まじりもののない純粋な土という意味だとするとおもしろいのですが。それはともかく、マージはミネラルを多く含む一方、有機物は少ないです。また国頭マージは強酸性、島尻マージはアルカリ性が強いのです。

そこで野菜などを育てるために最適な土づくりが行われてきました。国頭マージの北部ではパイナップル、島尻マージとジャーガルの中南部では野菜、そして各地でさとうきびが栽培されています。沖積土壌の海岸部ではおもに水稻がつくられます。

沖縄本島の石と土には、このように大きな

特徴があります。アマミクが天からもってきた「土石」だからなのでしょう。

三 国土をつくった「草木」

『琉球神道記』と『御次第』から、「草木」を具体的にみていきましょう。

『琉球神道記』には「ダシカという木をあらわして、それが繁殖して山の形をつくりました。次にシキユという草を繁茂させ、またアダンという木を植えて、ようやく国の形になりました」とあります。また、『御次第』も、天の土と木、草を下ろすと国になるからと、クバ・マツ・ススキ・アダン・ハマゴウが下ろされたと伝えています。

これらの「草木」は、どのような植物なのでしょう。

ダシカ シマミサオノキ（島操の木）のことです。奄美諸島から南、沖縄島、台湾などの島々に分布するアカネ科の常緑小高木で、山地に生育しています。やんばるの森ではごくふつうにみられるそうです。密で強く弾力があるので、屋根の垂木などの建築材料や造船材、狩猟・魚労具の材などとして、また魔除け・祭祀に用いられました。

シキョ ススキのことです。沖縄諸島では神が愛でるものとされ、ススキの葉を束ねて先を十字に結び、家や田畑などを守る魔除けなどに利用されます。

ススキの草原は、琉球諸島ではもっとも広い面積を占め、代表的な草原といわれています。ただし、それは原初的な島の景観というわけではありません。ほとんどが森林伐採や耕作放棄、放牧、道造り、集落形成など人の手が加わった土地に生じた二次草原なのです。自然景観というよりも、文化的景観といった方がよいのかもしれませんが。

このススキやチガヤなどのイネ科植物の総称がカヤ（茅）で、屋根葺き材として広く利用されてきました。

アダン タコノキ科の常緑の小高木です。タコノキという名は、幹から出る太い気根がタコの足のように見えるからです。沖縄各地の海岸に自生しています。アダンは塩風に強いことから防風・防潮・防砂のため海岸や集落などに植えられました。また、果実は食用になりますし、葉を用いて箆や草履、笠・帽子、籠などをつくり、茎は漁具の材料となりました。ちなみに、アダン葉帽子（沖縄パナマ）は、近代沖縄の重要な特産品として日本はもとより欧米にも輸出されました。

クバ（ビロウ） ヤシ科の常緑の高木で、15m～20mの高さになります。海岸近くの森や山地の石灰岩質土壤に自生し、亜熱帯の植生の特色を示しています。御嶽の奥にはクバが繁茂し、とくに高いクバの木には神が降臨すると信じられています。今帰仁村のクバの御嶽や久高島のクバの御嶽など、クバを冠した御嶽がありますし、また神の名にもクバがつけられています。

クバの木は幹は柱として利用され、また葉は屋根葺き材、そして笠・団扇^{うちわ}・柄杓^{ひしゃく}などの生活道具の材料として使用されました。クバの葉は現在も泡盛の酒瓶を包むのに使われています。

注目されるのは、クバが神事に深くかかわっていることです。聞得大君が斎場御嶽で即位式をおこなうにあたり、クバを葺いた仮屋を建てました。また、扇など神聖な祭具の材料ともなりました。

本土の平安時代には、天皇即位の重要な儀式である大嘗祭に先だつて祓^{はらえ}のためにこもる「百子帳」という仮屋がつけられました。それはクバで葺かれていました。クバの扇も使われていましたし、クバの葉を細く裂いて白くさらした糸で葺いた「檳榔毛^{びろうげ}の車^{くるま}」は、上皇・親王・大臣などが用いる最高級の牛車^{ぎっしや}でした。

マツ リュウキュウマツのことで、マツ科の常緑の針葉樹です。高木で、25mの高さ

に達します。琉球諸島に分布する固有種で、二次林や先駆植生として出現し、海岸低地から山地まで生育します。リュウキュウマツは、建築や家具の材料として、また燃料として使われていました。風や塩に強い性質があることから防風林・防砂林・防潮林として、そして樹形が美しいことから街路樹・緑化樹として利用されています。

こうしたリュウキュウマツの植林は、琉球王国の初期の時代からおこなわれてきました。尚真王（在位1477～1526）は首里の美観形成と建築材の育成を目的としてリュウキュウマツを植えました。リュウキュウマツは、1967年、ガジュマルやフクギをおさえて沖縄県の県木に選ばれています。

ハマゴウ クマツヅラ科の常緑の低木で、海辺の砂浜に群生し、特有の香りがあります。『御次第』には「浜ハウ木」と記されていて、浜を這うことからハマゴウに転訛したとか、「花が香る＝花香」に由来するなどといわれています。

ハマゴウは海岸の砂防に利用され、その葉は蚊とり線香に使われましたが、もっと重要な用途として薬用があります。葉・茎・茎葉・果実・種子には鎮痛などの薬効があるのです。種子は漢方では蔓荊子^{まんけいし}と呼ばれ、頭痛に効くとされています。

四 琉球の原風景

琉球の国土を形成したという草木は、当然のことながら、いずれも沖縄の山地と平地（野原）と海岸に広く生育する植物です。国土の自然景観を形成していますが、人の暮らしのなかで出現したススキの草原やアダン・リュウキュウマツの防風林・防潮林・防砂林、またリュウキュウマツの植林・並木などは、文化的景観というべきものでしょう。

開闢神話の草木は、聖なる神木クバをはじめとしてダシカやススキ、アダンなど信仰・

祭祀にかかわっていること、その一方で生活用具や建築の材料、食用、さらに薬として日常の暮らしを支えていることが興味深いと思います。ススキとアダンが『琉球神道記』と『御次第』に共通するのは、そうした多面的な有用性を示しているのでしょう。

ススキとリュウキュウマツの植生からする

と、『琉球神道記』・『御次第』の伝承は、国土形成の原初的な状態というよりも、むしろ琉球の人々が生活空間を開発してようやく国土らしい姿となったということでしょう。琉球の原風景を伝える神話として理解した方がよさそうにも思えますが、いかがでしょうか。

第6話

アマミク、〈森〉をつくる ～御嶽創成

一 「御嶽」とは

沖縄には今も1000以上の「御嶽」があるそうです。王府が編纂した地誌『琉球国由来記』(1713)は、902の「嶽」をあげています。その90%近くを沖縄諸島が占めていて、宮古・八重山諸島は10%ほどです。沖縄本島の御嶽(687)は、80%ほどが中南部に集中分布しています(『沖縄大百科事典』)。御嶽はどの村(シマ・クニ)にもあります。つまり、分布の偏りは村々の大半が本島中南部にあるためです。本島における地域開発の度合いを反映しているのでしょう。

さて、御嶽とは、沖縄の人々が信仰している聖地のことです。集落の背後にある小高い丘や山を、「腰当森」といいますが、「腰当」はよりどころ、後ろ楯のことなので、集落を守護する森という意味です。御嶽は、そうした丘や山にあることが多いのです。

森の中心や山の頂上など、御嶽の内部の奥深いところにあって、もっとも神聖な場所が「イビ」です。「イビ」には、クバの神木や神石、村の始祖の墓などがあります。「イビ」の前が拝む場所であり、香炉が置かれています。

『琉球神道記』(1608)は、「この国の風俗に、岳々浦々の大石や大木を、すべて神として崇める。そして、その神を拝み崇敬すると

靈験がある」と伝えています。こうした御嶽のありようからは、本土の鎮守の森とそのなかにある神木や磐座、また三輪山を神体とする大神神社(奈良県)などが自然に想起されます。

神を招いて祭祀をおこなう場所があります。本島南部(島尻地方)では「殿」、北部(国頭地方)では「神アシャギ」と呼ばれています。いずれも建築にかかわることばなのですが、建築の有無とは関係がありません。

「御嶽」は今や広く使われ、標準的な用語となっていますが、実は、時代によって、地域によって、また地域のなかでも、さまざまな呼びかたがあります。自然景観から森・嶽・山、人々が祈願することから拝所(オガミ=拝み)、聖所・聖地の意味もあるグスク(スク)などが多いようです。

『おもろさうし』をみると、森と嶽は対語のようですし、また森とグスクを並べた「もりぐすく」(森グスク)も、神の在す聖域を表すことばとして数多く使われています。また祭祀にオタカベを唱える神女にとっては崇所(たかべ)でした。

琉球の聖地を表現するさまざまなことば・方言は、それぞれの様相や特徴をあらわす一方で、混乱を招いているようにもみえます。そこで近世中期に琉球王府が統一的な公用語として「御嶽」と定めたようです。前期の『中

山世鑑』(1650)では九つの聖地のうち、七つが「森」と呼ばれ、「嶽」は「斎場嶽」のみです(斎場嶽は斎場森とも呼ばれていました)。末期の『御次第』(1875)になると、七つの聖地のうち、「玉城雨辻」以外は「御嶽」となっています。

二 琉球開闢と御嶽

「御嶽」はどのようにしてできたのでしょうか。御嶽の始まりは、一言でいえば、琉球開闢そのものなのです。

九御嶽と「島々国々の嶽々森々」

『中山世鑑』によると、創世神アマミクは、本島最北端辺土の「安須森^{アスムイ}」から首里の「首里森、真玉森」まで九御嶽を順番につくり、その後、「島々国々の嶽々森々」をつくりました。

一方、『御次第』の七御嶽は、荒海に干瀬が出現してできた、つまり創世神の手によるものではなく、いわば自然に生じたというのです。このような『御次第』の叙述はたいへん興味深いものですが、一般的なみかたではなかったようです。『おもろさうし』はアマミクの御嶽創出を謡い、また『琉球国由来記』も『中山世鑑』の説を伝えています。

さて、『中山世鑑』の記述には注目したいことが二つあります。一つは、アマミクが九御嶽をつくった順序です(後述)。もう一つは、アマミクが「島々国々の嶽々森々」をつくったということです。

「島々国々」と表現されていますが、島はシマ(村)、国は「シマ」とほぼ同じ意味です。つまり、「島々国々」は、「琉球のいたるところの村」ということです。「津々浦々」が「全国いたるところ」を意味するのと同じです。

「嶽」と「森」も、ほぼ同じ意味のことばです。つまり、『中山世鑑』は、アマミクが琉球のいたるところの村に〈森・嶽〉を創造し

たと記しているのです。大切な伝承だからでしょう。「島々国々の嶽々森々」は村を守護する祖霊神の御嶽です。

一方、『中山世鑑』が重視する九つの〈森・嶽〉は、王・王権・王国を守護する御嶽です。そのため王の健康長寿、王家の安泰・繁栄、国家安寧、航海安全、五穀豊穰などの祈願がおこなわれ、また久高・知念・玉城など南部の〈森・嶽〉には国王みずから行幸、親拝していました(1673年以降は代参)。

要するに、琉球の、開闢の、そしてアマミクの〈森・嶽〉は、「王の御嶽」と「村の御嶽」に大別されるのです。

ところで、琉球王国の統治そして王の権威は、行政と祭祀の二つの柱が支えていました。近世琉球王国について具体的にいうと、行政機構(王府)の最高位の官職が摂政^{せつせい}であり、祭祀機構の最高位の神職(神女)が聞得大君^{きこえおおきみ}でした。聞得大君以下の神女が「王の御嶽」の祭祀を担い、「村の御嶽」の祭祀は最末端のノロ(祝女、王国の官僚)がおこないました。

摂政である羽地朝秀の『中山世鑑』は国土から御嶽へと琉球の創造を語り、聞得大君にかかわる『御次第』は琉球の「立ち始め」を御嶽の超越的な出現に重ねます。『中山世鑑』と『御次第』が対照的なのは、それぞれの立場や信念、あるいはイデオロギーに由来するのでしょうか。そうしたちがいはあるにしても、ともに王権・王国の基盤に御嶽信仰があり、とりわけ「王の御嶽」を至高の御嶽とするのは同じです。

アマミクの森の分布

これからの話題は、『中山世鑑』の九御嶽と『御次第』の七御嶽、あわせて十一の名のある御嶽が中心となります。そこで、これらを指す便宜的な用語として、「アマミクの森」や「アマミクの御嶽」を使うことにします。

※国の名勝「アマミクヌムイ(アマミクの森)」

は、「開闢神話にまつわる御嶽」13箇所（九御嶽・七御嶽、越来グスク・伊祖グスク）が、「琉球固有の地形・地質、植生から成る聖地としての風景地」と価値付けられています。現在、今帰仁村のカナヒヤブ嶽とクバの御嶽、南城市の斎場御嶽、久高島のフボー御嶽、玉城アマツヅ（玉城グスク）、浦添市の伊祖グスク、那覇市の弁之御嶽、沖縄市のごゑく（越来グスク）が指定されています。

さて、アマミクの森を地域別に眺めてみましょう。琉球王国時代の村名ごとに整理すると、次のようになります。



アマミクの森の分布

北部：	
安須森（あおひの御嶽）	←国頭村
カナヒヤブ、こはの御嶽	←今帰仁村
南部：	
首里森、真玉森、弁之御嶽	←首里
知念森、斎場御嶽、久高コバウ森	
（こはの御嶽）	←知念村
藪薩の浦原、玉城アマツヅ	
（雨辻）	←玉城村

※太字は『中山世鑑』と『御次第』に共通する御嶽、（ ）内は『御次第』の御嶽名称。

※地域名称は旧村名。

アマミクの森も南部に集中していますが、全体の分布状況と比べてとくに不自然なところはなないようにみえます。とはいえ、かつての知念村に久高コバウ森と知念森、斎場嶽、隣接する玉城村に藪薩の浦原、玉城アマツヅ（雨辻）というように、密に存在しているのは、ふつうの状況とはいえないでしょう。首里に三つの森・嶽があること以上に、異様な状況と感じられます。

実は、国王が行幸・親拝した知念村と玉城村の御嶽には、正史などとは異なるアマミク伝説が残されています。そして、北部にあるアマミクの森にも、キンマモン神のふしぎな伝承があります。国頭の安須森は、『中山世鑑』の九御嶽の最初です。これにも何か大切な意味があるようです。

三 アマミクと琉球 ——いくつもの〈始まり〉

アマミク、最初の御嶽——安須森

『中山世鑑』は名のある〈森・嶽〉の創始を順番に記します。本島北端の辺戸岬に始まり、北部の本部半島、南部の知念半島、中部の首里台地に終わります。この順序には意味があるようにみえます。

首里王城の「首里森、真玉森」がアマミクの森の総仕上げであったのは、王府にとって都合のよいことでしょう。そうすると、アマミクが「まず一番に」つくった国頭辺土の「安須森」も、何か大切な意味をもっているように思えます。御嶽の創成が「安須森」から始まっていることは、以前から注目されているのですが、「安須森」は、なぜ「一番」だったのでしょうか。

琉球には古くから神や王が北から渡来するという観念があったそうです。琉球王国第一尚王統・第二尚王統の初代の出身地は、それぞれ北の方角にある伊平屋島・伊是名島といわれています。また源為朝の子供が琉球最初

の王統の初代舜天であるというのも、同じような伝説でしょう。こうした観念からすると、アマミクの森の「一番」が本島最北の辺土の「安須森」であるのは、自然なことのように思えます。

しかし、神話的なみかたとは正反対かもしれない、もっと現実的な説明もあります。本島の面積の半分以上を占める本島北部は、「やんばる（山原）」とも呼ばれるように山地が多く、王国の首都からも遠く離れています。しかし、辺境の地というわけではありませんでした。

為朝は、伊豆から奄美の島を經由して今帰仁の運天港に上陸したと伝わります。運天港は人・モノ・情報が流入する自然の良港です。本島北部、三山時代の「北山（^{ほくざん}山北ともいう）」は、海上交通の要衝を抱えていたのです。14世紀のなかごろには、薩摩→琉球（辺土・運天→波上）→福建という航路が利用されるようになり、いっそう重要さを増しました。北山を支配した強大な王権の本拠地が今帰仁グスクでした。

北山を滅ぼして琉球を統一した尚巴志は、二男の尚忠を「北山監守」とし、今帰仁グスクに置きます。それは、北山の治安を維持し、反乱を防ぐためだったのです（『中山世譜』）。第二尚王統の時代になってからも、王族が「北山監守」に任じられました。首里王府にとって、本島北部は特別な配慮が不可欠な、重要地域だったのです。しかし、王府は、「監守」による北山鎮撫では不十分とみたようです。

キンマモンの出現

キンマモンは琉球の国土と人々を守護する神です。「安須森」は、キンマモンの出現とふしぎなかわりがありました。『琉球神道記』（1608）から要点を整理しましょう。

- ・国頭のアオリ嶽にアオリが現れる。三つの嶽に三本のアオリが立つ（八月～九月）。

*アオリ（アオヒ、アフリ）とは涼傘^{リョウサン}のこと

です。中国から伝来した縁に^{ふさ}総のある大きな傘で、国王や高級神女の外出時に使用されました。

- ・村人は飛脚を立て、王殿に奏上する。
- ・十月、かならずキンマモンが現れる。
- ・その時、首里王城の御庭^{ウナ}で神祭りをする。

涼傘が立つ三つの御嶽は、今帰仁の「アフリノハナ」と「こはおの御嶽」、そして辺土の「あおひ之御嶽（アオリ嶽）」です。「あおひ之御嶽」は、国頭の靈山である辺土岳の頂きに北から南に並ぶ三つの岩山（岳・嶽）の一つで、辺戸岳にあるこれらの御嶽の総称が「安須森」です。

「安須森」と「こはおの御嶽」のアオリが、キンマモンの出現を告知しますが、出現するのは北山の御嶽ではありません。キンマモンは琉球王権・王国にとってもっとも重要な御嶽、「首里森、真玉森」に現れるようです。その時、御庭が神祭りの場となるのです。

国頭の深山に涼傘が立つとキンマモンが出現するという伝承は、古琉球の時代にさかのぼります。神出現の予兆を王府に連絡する役割は、琉球王権・王国がキンマモンによって守護されていることを強く思い起こさせたにちがいありません。琉球の人々の根底にある御嶽信仰を、北山の「監守」としたのではないのでしょうか。

アマミク、最初の天下りと神への祈り

——知念森と玉城アマツツ

知念グスク（史跡）は、琉球石灰岩の台地に立地しています。古城と新城からなりますが、『おもろさうし』に謡われる「知念森」・「知念森グスク」は古城にあたります。アマミクの聖地はその頂上にありました。オモロは、知念森を立派なグスクと讃えるとともに、アマミキヨがはじめて天から降りた聖地、アマミキヨがはじめて^の宣立て（神への祈り）をした聖地と謡っています。こうした知念森は、アマミクの森のなかでも特別な由緒をもつと



知念グスク 正門



玉城グスク 正門

いえそうです。

玉城アマツツも、丘陵上に立地する玉城グスク（史跡）の主郭にある御嶽です。玉城グスクという名には「グスク」が重複しています。本来は『おもろさうし』にあるように、「玉グスク」なのでしょう。『おもろさうし』には「玉城森グスク」とも語られています。アマツツは「天頂^{あまつち}」で、天高く聳える山の頂上ということでしょう。オモロは、神がこの玉グスクの天頂に天降りをする様子はじつにみごとだと讃えています。

アマミクの御嶽を内包する玉城グスクには、グスクそのものがアマミクによってつくられたという伝承が残ります。またグスクの主は天孫氏であったとも、英祖王統第四代の玉城王は王子の時代に玉城グスクを居城としていたとも、伝わっています。きわめて歴史の古いグスクとみられていたのでしょう。



玉城グスクの御嶽

ところで、「玉グスク」のオモロに、「雲子玉グスク、真玉森グスクで、按司様は大君神女に知られて守られよ」とあります。このように「真玉森グスク」は、「玉グスク」の別称なのです。その「真玉森グスク」のなかに「君誇り」という名の建築をつくっています。これらは、首里王城の真玉森グスクそして奉神門（君誇門）との関連から興味深いところです。国の核である玉グスクにいる按司がこの世を守護し支配し続けるようにと、神女が祈りますが、祈りの内容やその姿も首里王城の聞得大君と重なります。玉グスクと首里王城（真玉グスク）のあいだには深い関係があったのでしょうか。

アマミク、最初の上陸と稲作発祥

——藪薩の浦原

藪薩の浦原は、その名称もほかのアマミクの森とは異なり、ユニークです。そしてアマミクとのかかわりや由緒について、ある意味で知念森とは正反対のできごとを伝えています。

藪薩の浦原という名は御嶽の成り立ちや範囲とかかわっているようです。藪薩の浦原は、石灰岩丘陵の藪薩原にある藪薩御嶽、その南西の海岸近くの浜川浦原にあるヤハラヅカサ（浜川御嶽）と受水走水^{ウキンジュヘインジュ}など、当地（玉城村百名）のアマミク神話にかかわる聖域の総称とみられます。



ヤハラヅカサ

さて、浜川浦原のヤハラヅカサは、東の海の彼方にあるニライ・カナイから渡来したアマミクが上陸したところと伝わっています。その後、アマミクが移り住んだという聖地が近くの丘陵にあるミントングスクです。

受水走水（二つの泉のことで、西方が受水、東方が走水）は、アマミキヨがニライ・カナイから稲の種子をもってきて、村人につくり方を教えたという稲作発祥の地とされています。しかし『中山世鑑』によると、アマミクが受水走水に植えた稲は天からもってきたものです。

アマミクと稲は、海から渡来したのでしょうか。あるいは天から下ったのでしょうか。琉球国王はかつて玉城へ行幸していました。この行幸の由来について、『琉球国由来記』は稲の種子が海から渡来したという稲作起源神話をあげています。

四 アマミク、至高の聖地 ——久高コバウ森と斎場嶽

久高コバウ森

久高島の村ではコバウ森の由来・由緒について、独自の伝承がありました。『琉球国由来記』（1713）が伝える、久高島の古老の話をお聞きしましょう（巻一・巻十三）。

大昔、天孫氏のころ、久高島にアナゴノ子とアナゴノ姥という夫婦が住んでいました。



久高コバウ森の入口付近

久高島にはじめて住んだ根人です。

ある日、浜近くに壺が流れ着いたのですが、取りあげようとしても取れません。しかし、遠く離れることもありませんでした。家に帰って妻にこの話をすると、妻は行水して身を清め、白衣を着て取るようにといました。そこで、沐浴潔斎して浜へ行き、袖を広げて壺をすくおうとすると、波にゆられてすぐに袖にのりました。喜んで取りあげて家に帰り、壺の口を開けてみると、麦・粟・黍・扁豆・クパ・アザカ・シキヨの七つの種子が入っていました。

所々に蒔くと、すべて成育しました。クバはぬきんでて高くすぐれ、アザカ・シキヨは繁茂して、「森嶽」となりました。

この「森嶽」にキンマモン（琉球の守護神）がたびたび出現され、まことに神のおおわします、奥深く神秘的な嶽です。こうして「森嶽」がはじめて建ったのです。願いを祈ると、靈験がありました。そこで人々は御嶽を崇め始めました。

高く秀でたクパと繁茂するアザカ・シキヨがつくりなす景観は、神霊のよりつく聖域「森嶽」の根源的な姿なのでしょう。そして古老は、神の出現によってはじめて「森嶽」が建った、さらに祈願に応じた靈験があったので人々は御嶽を崇めるようになった、と語ります。御嶽の成り立ちや信仰のありようがよくわかります。

村の創始者の根人^{ねひと}が耕作した田や畑、そして自然のなかに生まれた御嶽。そうした土地に、神を招請して祭祀をおこなう場所があり、ダシカの垂木にシキヨの屋根、アダンの筵を敷いた素朴な掘立柱の小屋がいくつか並び立ち、石積みの垣で囲われています。こうした姿は、琉球村落の原型のようにみえます。久高島の古老は、琉球の人々の暮らしがどのように始まったのかについても語っているようです。

ところで、久高島に流れ着いた霊力のある壺に入っていたのは、麦・粟・黍・扁豆でした。それらはアマミクが久高島に蒔いたものと同じです。海の彼方（ニライ・カナイ）から渡来したもの、天（オボツ・カグラ）から下りて来たもの、といううちがいは、何を意味しているのでしょうか。18世紀の地誌『琉球国由来記』と17世紀の正史『中山世鑑』の視点・立場の差異があるのでしょうか。また民衆と王府の世界観のへだたりをあらわしているようでもあります。

森・嶽の条件

森・嶽であるためには何が必要なのでしょう。それは、「高く秀でたクバ（蒲葵）の木、アザカ、シキヨが生い茂っていること」だそうです（『おもろさうし辞典・総索引』）。クバとシキヨ（ススキ）は、すでに説明したように国土（島）を形成した草木です。

アザカと沖縄方言で呼ばれる木には、ボチョウジとナガミボチョウジの二つがあります。ともにアカネ科の常緑低木（高さ1.5～3m）です。そして、ススキとともに神が愛でるものとされ、魔除けや祭祀に使われます。

ボチョウジはリュウキュウアオキとも呼ばれ、非石灰岩地域の山地の常緑広葉樹林の林床に成育します。一方、ナガミボチョウジは石灰岩地域の常緑広葉樹林の林床に生えます。

非石灰岩と石灰岩、すなわち沖縄本島の地質の大きなちがいに对应して、植生の単位で

あるリュウキュウアオキスダシイ群団、リュウキュウガキーナガミボチョウジ群団があります。そこにアザカのそれぞれの名が冠されているのです。アザカは沖縄本島の成り立ちとその典型的な植生のシンボルといってもよいでしょう。

クバ・アザカ・シキヨのほか、マネ（クロツグ）も、御嶽の聖木とされています。高さ3mほどになるヤシ科の植物です。ある屋敷は、にわかにススキとマネとクバが生い立ったので、嶽として崇められることになりました。

高さ1～2mのススキ、その1.5倍ほどの高さがあるボチョウジとナガミボチョウジ、あるいはクロツグ、そして20mの高さになるクバ。これは久高の古老が伝える「コバウ森」の姿でもあります。神が愛でる草木と神が降臨する木が三層をなしている森・嶽の姿には、深い意味があるのでしょうか。

斎場嶽——水と国土

斎場嶽^{さいは}は、聞得大君の就任儀式「お新下り^{あらお}」が行なわれた聖地で、「さいは森」とも呼ばれていました。高さ100mほどの小規模な琉球石灰岩台地のサヤハ原・長堂原にあります。この斎場嶽そして久高コバウ森、藪薩の浦原は、低く平らなところ、原に立地しています。山や丘の頂きを占めるほかのアマミクの森とは対照的といえるでしょう。



斎場御嶽

斎場嶽の神聖な場所、「イビ」は、聳え立つ三つの巨巖とそれらがつくり出す三角形の洞穴状の空間の辺りにあります。洞穴を抜けると、東の海上に久高島を望むことができます。

巨巖の頂きから二つの鍾乳石が垂れ下がっていますが、それらの鍾乳石を伝って滴りおちる水も、「イビ」です。『御次第』はその名



斎場御嶽 二つの鍾乳石、二つの壺の聖なる水

を、「しきよたよる雨（天）か美御水」と「雨（天）たよるあしか美御水」と記しています。

「しきよ」と「あしか」には、それぞれいくつかの植物名が重なり合わさっているようです。それを解きほぐして全体の意味を推しはかりますと、聖なるシキヨ（ススキ）や稲・麦が繁茂のたのみとする御水、また聖木のアザカやダシカ（シマミサオノキ）が成育のたのみとする御水、と理解できるでしょう。なお、このアザカは石灰岩地域に生えるナガミボチョウジのことです。

本島中南部では、琉球石灰岩の台地から水が湧出します。その水はアマミクの国土と森・嶽をつくる草木や五穀を潤し育み、琉球・沖縄の人々の生命と生活の基盤となっているのです。斎場嶽の「御水」はその象徴といえるでしょう。

第7話

御嶽と建築

神社の本殿や拝殿、鳥居などにあたる建造物は、御嶽にもあったのでしょうか。本殿がない神社はまれですが、沖縄本島の御嶽は本殿も拝殿も鳥居もないのがふつうです。人工的な建造物がなく、自然のままであるのが御嶽の大きな特色ともいえるでしょう。

とはいえ、そうではない御嶽も古くからありました。園比屋武御嶽の前に立つ石門（世界遺産）は、その代表的な遺構であり、そしてすぐれた意匠の建築といえるでしょう。かつて伊東忠太は「琉球固有の宗教建築で今日現存する最善最良なるもの」と讃えました。

一 園比屋武御嶽石門の創建

園比屋武御嶽と弁之御嶽

園比屋武御嶽石門は、第二尚王統の尚真王

の時代、1519年の創建です。この年、^{ビンヌ}弁之御嶽の石門も建てられました。ほとんど同じ様式である二つの石門は、尚真王による一連の造営事業の所産です。

『球陽』などによると、尚真王は、園比屋武御嶽の内に花木を植え、石を築いて垣をつ



園比屋武御嶽石門

くり、前に石門を開きました。また、弁之御嶽でも、石を築いて垣となし、前に石門を開きました。ただ、弁之御嶽への往還が困難であったので、次の尚清王が、1543年に石畳と松並木の参詣路をつくり、また御嶽の内に樹木を植え、外に木造の拝殿を建て（拝殿跡の石敷遺構が検出されています）、「壮観」となるように整えました。立派な景観をつくりだすことは、国王の権威を発揚するという造営事業の大きな目的にも沿っていたのです。

御嶽の造営とは、石垣を築き、石門を開き、そしてなかに花木・樹木を植えることのようにです。とくにめずらしいところがない、ふつうの外構工事のようにみえます。とはいえ、この石門は木製の扉も備えているのですが、いつも御嶽の出入口として機能しているわけではありません。聖域の境界にあって拝むための場所、いうなら結界と拝所（拝殿）の建築なのです。

そもそも、鬱蒼とした森に包まれた園比屋武御嶽と弁之御嶽に、石垣・石門などの人工物を人為的に加えること自体、むしろ異様なしわざと思われれます。しかし、石牆と石門の構築は、周囲の俗界から御嶽を物理的に隔離し、そして可視化することになります。いっそう御嶽が神聖化されると考えられたのでしょう。

あるオモロは、園比屋武御嶽の造営を、「森グスクとして造営して」と謡っています。「森グスク」は、聖地であり、同時にグスクであるという複合語です。園比屋武御嶽のような石垣（グスク）に囲い込まれた聖地を指しています。

また、城郭（グスク）に囲い込まれた御嶽も、「森グスク」です。オモロには城郭（グスク）のなかの〈森グスク〉がいくつも謡われていて、ありふれた存在であったことが知られます。アマミクの森では、知念森や玉城アマツツ、首里森、真玉森、今帰仁のカナヒヤブなど、五つが「森グスク」なのです。さ

らに、首里森グスクと真玉森グスクのように、石垣と城郭、つまり二重のグスクに囲い込まれた御嶽もありました。

ところで、園比屋武御嶽と弁之御嶽は、どのような御嶽なのでしょう。

園比屋武御嶽と弁之御嶽は、琉球王国にとって大切な御嶽でした。『琉球国由来記』は首都の御嶽を「城中の御嶽」と「首里中の御嶽」に分けていますが、「首里中の御嶽」の代表というべき御嶽が園比屋武御嶽と弁之御嶽です。

園比屋武御嶽は歓会門の外、守礼門の手前、道の北側に立地します。安国山の一郭を占めていて、後方には円鑑池や龍潭があります。

園比屋武御嶽の祈願は、首里森や真玉森など「城中の御嶽」と同じ扱いとされ、たいへん重視されていました。また、国王は、行幸にあたってかならず園比屋武御嶽に拝礼しました。それは神の託言によってある権臣の謀反・暗殺の企みを知り、大難を免れた故事に由来します。

なお、『おもろさうし』では「園比屋武」の対語は、「金比屋武^{カナヒヤブ}」です。『中山世鑑』の九御嶽の一つ、今帰仁の「カナヒヤブ」です。かつての山北王の拠点、今帰仁グスクを守護した「カナヒヤブ」とのかかわりは謎めいています。

弁之御嶽は、那覇市内の最高地点である弁ヶ岳に立地しています。弁ヶ岳を「冤嶽」（冕は冠のこと）というのは、諸峰に冠たる山とされたからです。

弁之御嶽には北の大嶽と南の小嶽があります。大嶽から久高島（コバウ森）、また小嶽から斎場御嶽を遙拝するなど、弁之御嶽は第二尚王統と縁の深い東^{アガリ}の地域（とくに知念・玉城）、そのアマミクの森とも深くかかわっています。

尚真・尚清王以降、弁之御嶽は王権・国王との関係を深め、1644年には健康長寿・子孫繁栄・国家安穩を祈願する国王参詣も始まり

まず。風水が重視された18世紀前半、弁之岳は、首里城風水において首里城の玄武（北）にあるとみなされ、「城基発祖の地」、主山（鎮山）と位置づけられます。こうして王国末期には『御次第』の七御嶽の一つとなり、園比屋武御嶽を凌駕したのです。

建築様式

園比屋武御嶽石門は、一間平唐門という形式で、左右に短い石牆が付きます。木の扉のほかはすべて石造です。石を刻んで木造板葺の建築の姿を表現しています。段葺状の唐破風の屋根や、一軒で疎極の軒廻り、両妻の懸魚なども、石から造りだされたものです。棟は、中央に火焰宝珠をのせ、両端に鴟尾と鬼板を飾り、側面には牡丹、唐草模様を浮き彫りにしています。

唐破風屋根より下は日本建築、その上の棟は中国建築を受容したものでしょう。日本建築を基盤として、中国建築の要素を象徴的に飾り付けています。日本と中国の建築様式細部を上下に組みあわせ、折衷した様式ともいえるでしょう。美しく整った姿と合わせ、琉球建築の特徴をよく示しています。

弁之御嶽石門は、園比屋武御嶽石門よりすこし小規模ですが、ほとんど同じ様式でした。沖縄戦で破壊されたのが惜まれます。



園比屋武御嶽石門 棟の火焰宝珠と鴟吻

石工・西塘

園比屋武御嶽石門と弁之御嶽石門は、八重山竹富島出身の西塘の手になると伝わっています。西塘とは、どのような人物だったのでしょうか。

1500年の八重山の謀反とされる事件の時、討伐に入った王府軍は、西塘の「心よく、ことに利発」、「俊秀にして器量非凡」な人柄を見込んで、首里に連れて帰りました。そして法司（王の下で政治全般を司る）のところで勤務させましたが、西塘は十数年にわたって忠節を尽くしました。園比屋武御嶽石門を造営することになった時、法司は西塘が「善巧精工」のすぐれた石工であることから、朝廷に奏して工事責任者に抜擢したのです。

首里には今も円覚寺の放生橋（重要文化財、1498）や王陵の玉御殿（国宝、1501）、円鑑池の天女橋（観蓮橋、重要文化財、1502）などすぐれた石造建築が残っています。石工・西塘の意匠と技術は、こうした高い水準にあった石造建築を数多くみるなかで培われ、いっそう磨かれたのではないのでしょうか。

二 首里森グスク・真玉森グスクの創造

「城中の御嶽」の代表、双壁ともいふべき御嶽が首里森と真玉森です。オモロには「首里森グスク」・「真玉森グスク」とも謡われますが、いつ（森グスク）として造営されたのでしょうか。

尚真王（1465～1526、在位1477～1526）は、50年に及ぶ在位期間のうち、実権を握った後半30年ほどのあいだに大造営をおこないました。いくつかあげますと、1492年に菩提寺の円覚寺、1501年に王陵の玉御殿、1502年に円鑑池・経蔵・天女橋、晩年の1522年に軍事施設の真玉道・真玉橋を造営しています。

首里森グスク・真玉森グスクの造営時期を明らかにする史料はありませんが、『おもしろさうし』巻一が編集された1531年よりかなり

前であることはいうまでもないでしょう。また、城外の園比屋武御嶽と弁之御嶽が〈森グスク〉として整備された1519年より遅れることもないでしょう。

重要なポイントは、尚真王と聞得大君（尚真の妹）と首里森グスク・真玉森グスクが緊密な政治・宗教制度的関係にあることです。尚真王は王国の神女組織を確立し、国王を守護する「オナリ神（姉妹神）」の妹を、神女組織の頂点である聞得大君に任命しました。最初の聞得大君です。聞得大君が首里森グスクと真玉森グスクにおいて祈ることにより、尚真王は国を治める霊力を授かります。そして首里森グスクと真玉森グスクは、聞得大君の祭祀空間であるとともに、王と王権、王城、琉球を守護する御嶽です。尚真王と聞得大君と首里森グスク・真玉森グスクは、三位一体なのです。

1501年の「玉御殿の碑文」にはその妹の名が「聞得大君」の肩書とともに記されています。したがって、聞得大君など神女組織の確立は1501年以前のことになります。そうすると、首里森グスク・真玉森グスクの造営も1501年以前、およそ1490年代と考えるのが自然でしょう。菩提寺と王陵の造営のあいだにあたります。

政治的権威と宗教的権威の並立そして相互依存の関係は、尚真王期に確立されましたが、そうした関係を具体的かつ永続的にあらし、支えているのが首里森グスクと真玉森グスクなのです。二つの御嶽を祭政一体の象徴として明瞭に視覚化することは、王権の必然的な要請であったというべきでしょう。首里森グスクと真玉森グスクは、第二尚王統の最初のそしてもっとも壮麗な〈森グスク〉でなければならなかったのです。

首里森グスク・真玉森グスクも、園比屋武御嶽と同じように、石を築いて垣をつくり、前に石門を開き、花木を植えたのでしょうか。オモロによると、その姿は神のおられる天上

の聖域、「^{コガネウチ}金内」に譬えられるほど立派という事です。園比屋武御嶽をはるかに凌駕するものであったのでしょうか。尚真王は、〈御嶽〉の新たな様式を創出したとってよいのかもしれない。

三 拝殿・門・鳥居の普及

拝殿や門の建立は、古琉球の時代にはじまります。しかし、それは王権・王国の守護にかかわる「御嶽」にほぼ限られていたと考えた方がよいでしょう。ある程度広がりを見せるのは、近世琉球の時代に入ってからのです。御嶽を崇め信仰する人たちが、拝殿や門を建てるのです。事例をいくつかあげましょう。

首里の内金城御嶽には拝殿がありませんでした。1660年になって、村人たちは王府に申請し許可を得て、募縁、私財寄付、資金援助などによって拝殿を創建しました。

同じころ、首里の免津良嶽の拝殿も創建されています。尚貞王（1669即位）が世子であった時（1663-1668）、工事費を喜捨して新造しました。

那覇港に面した硫黄城のなかに御嶽がありました。那覇の人々や薩摩の船頭・水主の寄付によって、1686年に拝殿、1694年に御嶽の門が「再建」されました。拝殿と門の創建は、16世紀にさかのぼるのかもしれませんが。

1778年、弁之御嶽に「鳥居」が建てられました。種子島の伝平が王府の許可を得て、奉建したのです。弁之御嶽に「鳥居」を建てることは問題にならなかったようです。御嶽の「鳥居」は、18世紀後半にはめずらしくない景観になっていたのでしょうか。

17世紀中ごろ以降、首里や那覇の御嶽に拝殿・門・鳥居が建立されたことがわかります。正面に建築が付け加わった御嶽は、前代に比べると、神社にすこし似てきたともいえるでしょう。

統治と祭祀のデュアルシステム

—二つの森、二つの正殿、二つのグスク

第一尚王統第六代の尚泰久王（在位1454～60）は、仏教の興隆に熱心で、寺院をいくつも創建し、また有名な万国津梁の鐘など多数の梵鐘をつくらせました。

この尚泰久王の統治の安寧を祈願して、神女の国笠（首里森の神女か）と真玉森の親ノロ神女が「首里森」と「真玉森」に降り、太陽神を崇め祈りました（『おもろさうし』五-233）。このオモロは、「首里森」と「真玉森」という二つの特別な聖地と、そこで国王の治世安泰を祈る祭祀が、第一尚王統の時代にさかのぼることを示しています。

なぜ特別な聖地が二つあるのでしょうか。城郭グスクを守護する〈森〉が一つであることは、今帰仁グスクとカナヒヤブ、知念グスクと知念森、玉城グスクと玉城アマツツなどをあげるまでもなく、当然のように思えます。

古琉球の首里王城はどのようなグスクだったのでしょうか。この答えが明らかになると、なぜ首里王城に二つの特別な聖地があるのか、なぜそれらが「首里森」と「真玉森」なのかという疑問は、おのずと解消されるでしょう。ここでは古琉球期の国王のグスクを「首里王城」と表記し、首里城、首里グスクとしないのですが、その理由も明らかになるでしょう。

首里王城の空間構造

首里王城の長い歴史のなかで、その実態が比較的よくわかっているのは18世紀前半～戦前です。そこで、近世後期の状況、とくに内郭の空間構造について説明し、古琉球の首里王城を語る準備としましょう。

首里王城の内郭は、国家儀礼（冊封儀礼）や政治・行政の拠点となる統治の空間、国王とその家族などの居住の空間、そして祭祀の



首里城全体図（2019年焼失以前）

空間からなるといえるでしょう。

正殿とその西方が、統治の空間です。正殿・北殿・南殿がもっとも重要な施設であり、儀礼や祭祀の場となる御庭を取り囲んでいます。

御庭の西にある下之御庭は、北辺に大与座と寺社座、西辺に糸国座・用物座などの役所が置かれ、奉神門に近い東南のところに首里森御嶽が鎮座しています。下之御庭は行政と信仰が並存する空間です。

二つの広場、御庭と下之御庭は、ともに長方形や正方形ではなく、辺や頂角が異なっています。アシンメトリー（非対称）であることが、とくに御庭の大きな特色、魅力となっています。

正殿東方の^{ウチバラ}ウチバラは、国王とその家族などが居住する空間、御内原で、男子禁制でした。国王の^{ニケウドゥン}ニケウドゥン、国王と王妃の^{クガニウドゥン}クガニウドゥン黄金御殿、世子の即位礼の場となる^{よほりてん}世誇殿などがありました。

昔、正殿の西方は「表」、東方は「内」と呼ばれていたそうです。生活空間を「表」と「奥」、「公（パブリック）」と「私（プライベート）」のように大別する空間意識は、近世日本と共通しています。

王城内にはいくつもの聖域・御嶽がありますが、「京の内」は下之御庭の南の広い地域を占め、最大の祭祀空間として機能していま

した。そのほか、御内原に「見物内」^{みもの}「真物内」^{まもの}などの「内」(聖域)があります。これらはオモロにも謡われていて、古琉球の時代から続くようです。

いわゆる「首里城十嶽」は、正殿の東方に五嶽、西方に五嶽あったようです。西方五嶽のうち、三嶽が「京の内」に、首里森が「京の内」の北にあり、真玉森が「京の内」の東にあったとみられます。

以上のような内郭の空間構造は、南殿の創建以降、つまり近世琉球の特性です。古琉球の時代にはどのようなありようをしていたのでしょうか。

一 二つの〈森〉

— アマミクの首里森と真玉森

王城の御嶽を代表する首里森と真玉森は、ほかの十嶽とは異なる特別の機能、意味・意義をもっていました。『おもろさうし』によって説明しましょう。ただ、オモロはたいへん難解な古歌謡なので、引用は避け、おおよその意味を記すことにしました。

まず首里森・真玉森、あるいは首里森グスク・真玉森グスクということばを整理し、その後、形態や機能について説明することにしましょう。

首里森と真玉森の並立

『おもろさうし』では、首里森と真玉森、あるいは首里森グスクと真玉森グスクは、それぞれセットで謡い込まれています。真玉森(真玉森グスク)は、首里森(首里森グスク)の対語と説明されますが、オモロに数多くある対語とはかなり様相が異なります。

よくある対語は、同じもの・ことなどを異なることばで多彩に表現しようとしています。しかし、首里森(首里森グスク)と真玉森(真玉森グスク)は、それぞれが御嶽であるとはいえ、まったく異なる御嶽です。むしろ、ふ

たつが対等で並んでいる並立語と考えた方がよいでしょう。これは、首里森と真玉森、あるいは首里森グスクと真玉森グスクが謡われる場合の大きな特徴です。

ただ留意すべき点もあります。首里森(首里森グスク)と真玉森(真玉森グスク)の並立は、完全に対等ではなく、首里森が第一位、真玉森が次位という序列を内包しています。オモロでは先に首里森(首里森グスク)が謡われるのです。

たとえば、「首里森におられる英祖王の末裔の国王、真玉森におられる太陽神の末裔の国王」のように。このオモロでは、「英祖王の末裔」と「太陽神の末裔」も並立しています。ともに第二尚王統にとってかけがえのない王統譜ですが、「英祖王の末裔」がもっとも大切なのです。

首里森と真玉森が意味するもの

首里森と真玉森がアマミクの大昔にさかのぼるという伝承は、古琉球の時代にはあったようです。「アマミクの時代に始まった首里森グスク、真玉森グスク」と、オモロに謡われています。

この場合、首里森グスク・真玉森グスクは、首里森・真玉森と同じ意味といってさしつかえないでしょう。首里王城の十嶽のなかでもっとも神聖とされる二つの御嶽、これが第一義的な意味です。

〈森グスク〉という場合は、形態的・景観的な特徴が付け加わります。石垣(グスク)に囲い込まれた聖地(森)を意味する〈森グスク〉は、1531年に編集された『おもろさうし』巻一にも頻出します。じつは首里森・真玉森についても、首里森グスク・真玉森グスクの用例が多いのです。ことばとして、実態として、すでに〈森グスク〉が広く定着していたからでしょう。

首里森・真玉森あるいは首里森グスク・真玉森グスクは、御嶽とはまったく別のものを

指すこともあります。首里王城です。国を守護し支配する国王の本拠を、ことさらに御嶽の名で呼ぶのです。いわば首里王城の代名詞です。それは聖なる二つの御嶽が王権の淵源であり、象徴でもあるからでしょう。時には首里王城の主、国王を意味することもあります。

天下を統治する靈力

『おもろさうし』巻一の冒頭のおもろは、統治と祭祀と御嶽の関係を簡潔に語っています。「名高く靈力豊かな聞得大君が、首里森グスク、真玉森グスクに降臨し、神遊びをされたのだから、国を治める靈力を授かった国王様は天下を平らげてください」。

聞得大君は国王を守護する「オナリ神（姉妹神）」です。最高位の神女である聞得大君が首里森グスクと真玉森グスクにおいて祈ることにより、国王は天下を平定し、統治する靈力を授かります。

首里森グスクと真玉森グスクは、「おもろを謡い舞う」神遊びの場となっていますが、たんなる舞台ではありません。靈力を具備しているのです。おもろは「首里森グスク、真玉森グスクは、有名な、世を守護し支配する森」と謡います。王と王権、首里王城、琉球を守護し支配する首里森グスクと真玉森グスクは、アマミクの〈森・嶽〉の頂きに君臨するのです。

首里森と真玉森はどこに

神女とその組織について記した『女官御双紙』（1706年～13年の成立）は、首里森を「京の内の前の御庭^{ミヤ}首里の御いべ」とするので、現在地と考えてよいでしょう。発掘調査によると、「神の依り代と考えられる岩盤を取り囲むように、石積が構築されていた」ということです。たしかに首里森御嶽はある時期からこの地に存在していたのです。

ただ、王府は御嶽の移設も、時には断行し

ました。したがって、元来どこにあったかはつねに問題です。首里森は男子禁制ではない下之御庭にあります。立地がきわめて特異であることは、アマミクの首里森は別の場所にあったにちがいない、と強く考えさせます。

一方、『女官御双紙』は真玉森を「真玉城の玉の庭の御いべ」と記しています。「真玉城」と「玉の庭^{ミヤ}」の場所が手がかりになります。

『琉球国由来記』には「真玉城ノ御嶽 神名 玉ノミヤノ御いべ」とあります。同書の十嶽の表記は、いずれも所在と神名を併記する様式なので、この「真玉城」を、「御内原」や「キヤウノ内（京の内）」と同じように、首里王城のなかに存在したエリアの名称と考えてまちがいないでしょう。かつて真玉グスクと呼ばれた城郭グスクが存在した可能性も高いでしょう。真玉森は、もともと真玉グスクの御嶽であったはずで

1469年、第一尚王統の第七代尚徳王が薨じると、クーデターが勃発しました。この時、世子の命を救おうと乳母が抱いて逃げ、「真玉城」に隠れます。しかし追った兵士が世子を弑し、城外の崖下^{クンダグスク}に葬りました。のちにその葬所は「腓城」と呼ばれました。

2001年度のクンダグスク発掘調査は、京の内から城外に出る「抜け穴」の入口と出口を、同じ平面形の石積が取り囲むことを確認しました。また15世紀代に比定される銅鏡が出土しています。これにより15世紀には真玉グスクと真玉森が、京の内あるいはその近くにあった可能性が浮上してきました。秘密の「抜け穴」を隠していたのは、真玉森なのかもしれません。

重要なのは、真玉グスクの存在が現実味をおびてきたことです。首里王城には、二つのグスクがあったのでしょうか。また、二つのグスクがあったとすると、それぞれに正殿があったのでしょうか。

このあとの説明では『朝鮮王朝実録』（『李朝実録』）と使琉球録（冊封使の記録）を利

用します。いずれも古琉球に関する周知の基本史料です。前者は原文（漢文）と読み下し文、注釈、また後者は原文（漢文）と日本語訳、注釈のある史料集が公刊されていますので、読みやすく、理解しやすくなっています。つまり、古琉球の状況を伝える貴重な記述、そして先の二つの疑問の答は、すでによく知られている情報といってよいでしょう。そこで以下では、説明の流れが簡明であるように、またわかりやすく解説したいと思っています。

二 「三層閣」——三階建ての正殿

首里城正殿の特徴

18世紀前半に再建され、沖縄戦で焼失した首里城正殿の特徴をかたんに説明することからはじめましょう。

百浦添御殿・国殿・唐玻豊カラファーフなどと呼ばれた正殿は、琉球最大の木造建築です。入母屋造・本瓦葺の重層建築で、大唐破風の三間向拝が正面外観を豪華に飾ります。大棟の両端と向拝の棟に龍頭棟飾りをのせています。

内部は、一階（「下庫理」）が国王の出御する統治（政治・儀式）の空間、二階（「大庫理」）が国王の私的居住と祭祀の空間、三階が屋根裏の空間です。

最大の特徴は、内部が三層（三階建て、実質的には二階建て）になっていることです。中国の太和殿、朝鮮の勤政殿（景福宮正殿）、日本の大極殿は、内部は一つの大空間でした。琉球は、東アジアの基盤の上に、独自の建築様式、建築空間を創りだしたのです。それはいつの時代のことなのでしょうか

博多商人道安の話（1453年）

『朝鮮王朝実録』（『李朝実録』）は、李朝の五百年あまりの歴史を編年体で叙述した記録です。そこには古琉球の貴重な記録も含まれています。1453年に「琉球国中山王の使者道安」が語ったことはその一つです。道安は

博多商人で、朝鮮や琉球との交易・外交などで活躍していました。道安は、臣が国王に謁見する元旦などの儀式の時、琉球国王は「三層の殿上に坐」すと話しているのです。

1453年というと、首里王城や正殿がはじめて焼失した志魯・布里の乱の年です。史実かどうか、疑問視されていますが、いずれにしても、道安が知っていたのは尚巴志創建の正殿であり、首里グスク正殿は当初から三階建てと考えるとよいでしょう。

朝鮮人漂流民がみた正殿（1456年）

道安から10年後、『朝鮮王朝実録』の1463年の条には、琉球に漂着した人たちの見聞が二つ記載されています。一つは、1456年に济州島から琉球に漂着した梁成などの見聞です（原文は漢文、箇条書きにし、説明を補足しています）。

- ・王城はおよそ三重で、外城に倉庫ウマヤと廐がある。中城には侍衛の軍二百人余りがいる。
- ・内城には「二三層閣」がある。おおよそ、勤政殿（景福宮の正殿）のようである。国王は、吉日をえらんで往来してこれに居住する。
- ・その閣は板で覆われている（板葺）。板の上は鑞ろう（錫すずあるいは錫鉛の合金）を塗っている。
- ・「上層」に珍宝を蔵し、「下層」に酒食を置いている。王は「中層」に住んでいる。侍女が百余人いる。

内城にある「二三層閣」が理解の分かれる、重要なところだ。その解釈として、①「二の三層閣」（二棟の三階建て建築）、②「二、三の層閣」（二棟ないし三棟の重層建築）、③「二、三層の閣」（一棟の、二階建てないし三階建て建築）、が考えられます。

後に続く文章が大きなヒントです。国王の住む正殿が「上層」「中層」「下層」からなる「三層閣」であること、国王はこの「三層閣」を往来して居住すること、です。これらから

自然に①「二つの三層閣」（二棟の三階建て建築）という正解が導かれます。

梁成たちの報告は、当時の国王、尚泰久（在位1454～60）が居住する首里王城の正殿が「三層閣」、三階建ての宮殿であることを明確に示しているのです。道安とは別の有力な証言です。また、「三層閣」の正殿が景福宮の勤政殿に似ているというのも、重要な知見でしょう。

ただ、新しい大きな謎が生まれました。正殿と同じ様式、同じ使い方のもう一つの「三層閣」があり、尚泰久王が往来して居住するというのです。それは、いったい何なのでしょう。

三 二つの正殿

——「常御の宮」と「故宮」

朝鮮人漂流民がみた二つの正殿（1461年）

『朝鮮王朝実録』1463年の条のもう一つは、朝鮮人漂流民肖得誠ら8人からの聞き書きです。彼らは1461年2月に琉球に漂着し、2ヶ月余り本島に滞在しました。尚徳王（在位1461～69）は、彼らを「宮内の南の行廊（廻廊）」におき、日々呼び寄せて対面し、厚く食事をもてなしました。宮内に滞在した彼らには見聞の機会も少なからずあったことでしょう。彼らは次のように話しています。

国王は、二層の閣に住んでいる。その閣はみな、鮮やかな朱色の土を塗り、板葺で、大棟の両端には鑱ろうを塗っている。

外観の特徴を説明しているので、「二層の閣」は正殿の外観が二重という意味でしょう。ちなみに、肖得誠らの見聞に続く記事によると、宮殿の制度を問われた琉球の正使普須古は「王宮は乾清殿といい、三層ある」と答えています。

別の箇所にも「内城」にかかわる記事があります（錯誤があるので、関連部分のみ取りあげます）。要点は次の三つです。①尚徳王

が日頃居住する「常居の宮」があり、その南に「旧宮」があります。②尚徳王は時々「旧宮」に行き、数日に渡って滞在します。③「旧宮」の「層閣・城郭の制度」は、「常居の宮」と同じです。

王宮には、同じ様式、同じ使い方の「常居の宮」と「旧宮」があるのです。尚徳王の「常居の宮」と「旧宮」が父尚泰久王の「二つの三層閣」と同一であることは、いうまでもないでしょう。

ところで、「常居の宮」と「旧宮」は、ともに15世紀半ばの火災後に再建された建物であることが、発掘調査からわかります。したがって「旧宮」とは、「常居の宮」に比べて由緒の古い宮ということです。王宮には、歴史の異なる二つの正殿が並立していたのです。

冊封使がみた王宮、二つの正殿

明・清の皇帝が琉球国中山王を任命するために派遣した使者が冊封使です。最初の察度王統武寧（1404）から最後の第二尚王統尚泰（1866）まで、22度渡来しています。

冊封使は帰国後に皇帝に報告書（使琉球録）を提出しましたが、後には琉球の見聞なども記載するようになります。最古の使琉球録は、1534年来琉した尚清王の冊封使陳侃の『使琉球録』です。その後、郭汝霖・蕭崇業・夏子陽の『使琉球録』が続きます。

夏子陽は、1606年、第二尚王統第七代の尚寧王の冊封正使として琉球に渡りました。封王礼を挙げるために向かった首里王城で、夏子陽は南にあって北を向く「故宮」と、東にあって西を向く「常御の宮」をみたのです。そして貴重な画像の記録を残しました。中国・福建から那覇港そして首里城にいたる「琉球過海図」の最後の図です。

そこには、「欽会門」、「瑞泉」、「漏刻門」、「奉神門」、その東方、御庭をはさんで西向きに「今国王殿」、そして御庭の南に北向きの「琉球旧王殿」が描かれています。古琉球期正殿な



首里王城（夏子陽『使琉球録』に建物名を付加）

ど王城の外観を伝えるただ一つの史料です。「今国王殿」（「常御の宮」）と「琉球旧王殿」（「故宮」・「前王之殿」）の位置や向きは、本文の記述と一致します。

二つの正殿など16世紀の王宮の姿を、上記の『使琉球録』から整理しておきましょう。

- ・王宮には西向きと北向きの「宮」、南向きの「北宮」があります。二つの「宮」は「二層」、北宮は「平屋」です。いずれも「七間」（身舎の規模）、板葺き屋根です。
- ・西向きの「宮」が「正殿」（「常御の宮」「今国王殿」）です。王が常住し、一階が執政の空間（「朝堂」）、二階が生活の空間（「寝室」）です。床には厚さ一寸ほど蓆を重ねたものを敷きます。基壇は地面からあまり高くなく、階段は中国の陞むしろに似ています。
- ・北向きの「宮」（「故宮」「前王之殿」「琉球旧王殿」）は旧制で、風水の上でよくない。
- ・北宮は「正殿」の右にあります。賓客をここへ招き、また国王の寿をお祝いし、使臣の宴会をします。
- ・「正殿」の左に「楼」が二つあり、錢穀の類を貯蔵しています。

大切な点をあげますと、第二尚王統の16世紀においても同規模の二つの正殿が並立していて、第一尚王統の時代と変わりません。また、王の常住する正殿が一階を執政の空間、

二階を居住の空間とするのは、近世琉球と同じです。さらに、寄合よりあいの建築とよび「北宮」（尚真王が建てたとされる「北殿」）があることです。

首里王城に二棟の正殿建築が並立していたことは、たしかな史実です。しかも、15世紀中葉の火災焼失や1470年の第二尚王統への転換期をのり越え、150年以上にわたって受け継がれました。「故宮」は、古琉球の王権にとって欠くことのできない大切な存在だったのです。

四 二つのグスク

——首里グスクと真玉グスク

古琉球の首里王城には二棟の正殿があり、それぞれを中核とする首里グスクと真玉グスクが並存していました。二つの城郭グスクが複合し、一体となって、特異な巨大グスクを形成していたのです。これはほんとうに奇異な状況ですので、成り立ちをすこしていねいに説明しましょう。

「グスク御殿」＝「故宮」

『琉球国由来記』によると、^{ハエノウドゥン}「南風御殿（南殿）と御番所の敷地に^{グスクウドゥン}城御殿があった」と言い伝えていました。この「グスク御殿」と尚寧王の「故宮」は、同じ敷地の上にある同じ建築、と考えるほかないでしょう。

まず、この敷地に刻まれた記憶をたどっておきましょう。発掘調査によると、南殿跡は、古琉球期15世紀のⅠ期から近世琉球のⅥ期まで、基壇遺構が重なっていることが判明しています。これが、「旧宮」「故宮」「グスク御殿」などと呼ばれた建築が継続して建っていたと考える基盤です。また、正殿（第Ⅱ期）と「南殿」（第Ⅰ期）は、ともに火災の痕跡から1453年の志魯・布里の乱に焼失したと推定されています。

さて、オモロのなかの「グスク御殿」は、おおよそ首里王城のなかの御殿、とくに正殿＝百浦添御殿をさしています。一方、「南風御殿と御番所の敷地」にあった「グスク御殿」が百浦添御殿でないことは明らかです。「グスク御殿」は、南殿敷地にあった建築の名称、つまり固有名詞ないしそれに近い呼びかたになっていたのでしょうか。首里王城のなかに、「グスク」と呼ばれる特定の城郭・聖域・場所があり、そこに「グスク御殿」と呼ばれる正殿建築があったということです。

正殿は、グスクのなかで唯一無二の存在です。したがって、二つの正殿建築は二つのグスクの存在証明なのです。首里グスクとは異なるもう一つの「グスク」こそ、「真玉城」です。「真玉城の玉のみや（庭）の御いべ」や「真玉城ノ御嶽」などは、わずかながらも歴史を伝えていたのです。

「玉の庭」

ところで、正殿前の「御庭」は琉球王国にとってもっとも重要な儀礼の場所です。それは、「御城」と同じように、「御庭」という簡潔な呼びかたにもあらわれています。

オモロでは、「首里の庭」と「グスクの庭」（オモロ12-696）を並立しています。「首里の庭」は首里グスクの御庭、「グスクの庭」は「グスク」すなわち真玉グスクの庭です。両者は別々の庭のようですが、同じ庭です。庭の東辺に首里グスク正殿、南辺に「グスク御殿」（「故宮」）があって、ともに庭に正面を向けています。庭は二つの正殿の共用空間となっているのです。

御庭は「玉の庭」とも呼ばれていました（『琉球国由来記』）。「玉の庭」が本来の名称なのでしょう。真玉森の神名は「玉のみや（庭）の御いべ」なので、「玉の庭」は真玉グスクの庭の由緒正しい、また古くからの名称といえるでしょう。

「御庭」＝「玉の庭」は、〈首里グスク・

百浦添御殿・首里森〉と〈真玉グスク・「グスク御殿」・真玉森〉が、重層しつつ交叉する希有な場所なのです。

真玉グスクと中山王察度

さて、首里グスクと真玉グスクは、どちらが古いのでしょうか。

結論は、真玉グスクの方が古い、です。真玉グスクは、14世紀末には存在していました。理由は単純で、尚巴志王が首里グスクの整備、正殿の造営と同時に、あるいはその後に、新規に真玉グスクとその正殿を造営することなど、ありえないからです。

もうすこし補強しましょう。真玉グスク正殿は、1606年に来琉した夏子陽の『使琉球録』に「故宮」「前王之殿」「琉球旧王殿」とあります。「故宮」は、昔からある古い宮という意味です。しかし、真玉グスク正殿は、首里グスク正殿とともに15世紀中ごろの火災で焼失し、再建されていますので、とくに当時の真玉グスク正殿が古いというわけではありません。つまり、「故宮」とは、首里グスク正殿と比べて、歴史や由緒がより古いことをあらわしています。旧制で、風水の上でよくないとされるのも、その成立時期の古さに起因するのでしょうか。

さらに「前王」、「琉球旧王」にも注目すべきです。第一・第二尚王統の王は、首里グスク正殿に居住したので、「故宮」の「前（昔・以前）の王」、「琉球の古い（昔の）王」でないことは明らかです。そうすると、「前王」、とくに「琉球旧王」にあてはまりそうな前の王は、察度王統の二人、察度（在位1350～95）とその子の武寧（在位1395～1405）になるでしょう。

察度は、首里城に「遊観」のための「高樓」を建てたと伝わります（『中山世鑑』・『中山世譜』）。1576年、出火した天界寺の火の粉がこの楼、「高世層理」に燃えうつりましたが、消し止められています（『向姓系図家譜』）。『琉

『琉球由来記』は、察度の「高世層理」を琉球における楼の始まりとし、「下之玉庭（下之御庭）」の南、つまり京の内に北向きに造営したと記します（発掘調査では確認できていません）。

武寧の拠点が浦添グスクであったことを考えあわせると、「琉球旧王」にふさわしいのは察度といえるでしょう。真玉グスクとその正殿を造営したのは察度なのです。

首里王城の創建と継承——仮説

14世紀末、中山王察度は真玉グスクを本格的な城郭グスクに整備し、「玉の庭^{ミヤ}」（後に御庭）に北面して正殿（「故宮」・「グスク御殿」の前身建物）を創建します。また、その西方、北向きに「遊観」のための楼を建てました。神が渡来するという北の方角、そして北の浦添グスクを望見するかのように、重層の閣と高層の楼が東西に並び立っていたのです。

琉球を統一した尚巴志王は、王城として首里グスクを整備、造営しますが、真玉グスクとその正殿はそのまま残しました。二つのグスクの並立は、二つの貴重な価値をもたらしました。一つは、御庭を介して二つの正殿とグスクを一体化して創出した、これまでにない壮大なグスクであり、新王権と琉球王国の樹立を宣言するシンボルです。

もう一つは、真玉グスク正殿が、尚巴志王権の正統性を誇示する象徴的なモニュメントになったことです。日本中世と同様に、古琉球においても前王権の本拠を継承し居住することが、新王権の正統性の証明のようです。尚巴志王は、篡奪者ではなく、英祖王統・察度王統の真正な承継者でなければならなかったのです。

さらに推測を付け加えましょう。古琉球の二つの王統が真玉グスクを存置した、最大そして真の理由です。それは、真玉森こそが、国王に天下を平定し統治する霊力を授ける御嶽、琉球を守護し支配する御嶽だったからです。いいかえると、この上なく大切な真玉森そして真玉グスクを守護することこそ、古琉球の国王が果たすべきこの上なく重い責務だったのです。

王城首里グスクの成立

尚寧王の在位中の1609年、薩摩が琉球に侵攻しました。その結果、多くの変化が生じました。南殿（「南風御殿」）が創建されたのもその一つです。南殿は、在番奉行（薩摩藩の役人、那覇に駐在）と対面し歓待する、王位継承起請文作成儀礼をおこなう、五節句の時に「倭礼」（大和風の儀式）をおこなう、などの用途・機能を備えていました。

南殿の創建は、御庭^{クナー}の空間構成を大きく変えました。首里グスク正殿をただ一つの核とする空間構成へ刷新したのです。こうして過去を清算した首里グスクは、名実ともに近世琉球王国の王城として新たな歴史を歩みはじめます。

「故宮」・「グスク御殿」は、姿を消しました。「グスク御殿」の由緒、さらに真玉グスクや真玉森の存在さえ、まもなく忘れ去られます。

南殿は、新たな時代、近世琉球を象徴する建築といえるでしょう。しかし、それは古琉球の真玉グスクの存在を消し去りました。それは抹殺を隠蔽しているのかもしれませんが。

‘こころ’の首里城



復元された首里森御嶽

真玉森は現存していません。首里森は1880年の首里第一尋常高等小学校建築に際して西南の高台に移され、さらに1950年に創設された琉球大学のキャンパス整備にともなって、その遺構も撤去されたそうです。

創世神アマミクがつくり、霊力が高く「世を守護し支配する」といわれた首里森と真玉森。首里王城の御嶽のなかで特別に重要な、また神聖な御嶽でした。なのに、近世化、近

代化、沖縄戦、戦後の復興のなかで、琉球社会や首里グスクを守護することもかなわず、危機に直面した自身を守ることさえもかなわず、消滅しました。

今、下之御庭にある首里森御嶽は、1997年に発掘調査や史料にもとづいて復元・整備されました。〈天帝〉の末裔である人々が、〈島〉の「土石草木」を用いて「御嶽」を創造したのです。この「御嶽」は昔のように沖縄を守護し支配するのでしょうか。

それとも、「世界のウチナーンチュ」とその時代にふさわしい「腰当」＝‘よりどころ’が、八重干瀬^{ヤヒシ}や開關の七御嶽のように、隠れていた姿をあらわすのでしょうか。

それはすでに出現していました。ようやく気づいたのです、〈わたした‘くくる’〉に、〈私たちの‘こころ’〉に。

「世界のウチナーンチュ」の開關です。

参考文献

- 外間守善校注『おろもさうし』、岩波書店、2000
波照間永吉校注『おろもさうし〈上〉』、ゆまに書房、2022
伊從勉「首里グスクの御嶽と祭場」『琉球 交叉する歴史と文化』勉誠出版、2014
高橋康夫『海の「京都」——日本琉球都市史研究』、京都大学学術出版会、2015

- 高橋康夫『京都と首里——古都の文化遺産研究』、文理閣、2020.10
高良倉吉・島村幸一『首里城を解く——文化財継承のための礎を築く』、勉誠出版、2021
『首里城跡』発掘調査報告書
正殿跡、南殿・北殿跡、下之御庭首里森御嶽地区、京の内跡、城郭南側下地区ほか。